

# 水生昆虫の棲み分け論の実証から生息適地モデルへの発展



自然・環境マネジメント研究部 生態研究グループ 三橋 弘宗

## ■研究のきっかけとなった標本について

最初に取り組んだ研究は、水生昆虫のトビケラ 2 種の棲み分けに関する研究でした。扱った 2 種類は、アツバエグリトビケラ (Neophylax 属) で、非常に良く似た種で判別が難しいものでした。最初は新種かと思っていたのですが、よく調べると実は 1920 年代に採集された標本が京都大学に残されていました。この標本や全国から集めた標本をもとに、種の特長を再記載することで識別が可能となり、生態調査によって、2 種類が見事に場所や時間で棲み分けられていることが分かりました。上流と下流での棲み分け、両種が共存する地域では、季節と場所を違えて出現し、分布が重なる時期には流速と水深を違えて生息することが分かりました。こうした体系立てた記述は、気候変動や環境改変の影響を追跡する重要な記録となります。

大学に残されていた未知の標本との出会いが、生物の分布と環境との対応の重要性を認識するきっかけとなり、現在は、標本や過去の情報と環境要因を元にして、PC を駆使して様々な種の生息適地モデルをつくる研究へと発展しています。

[\(下側のアツバエグリトビケラ属の標本や記載図もご覧ください\)](#)

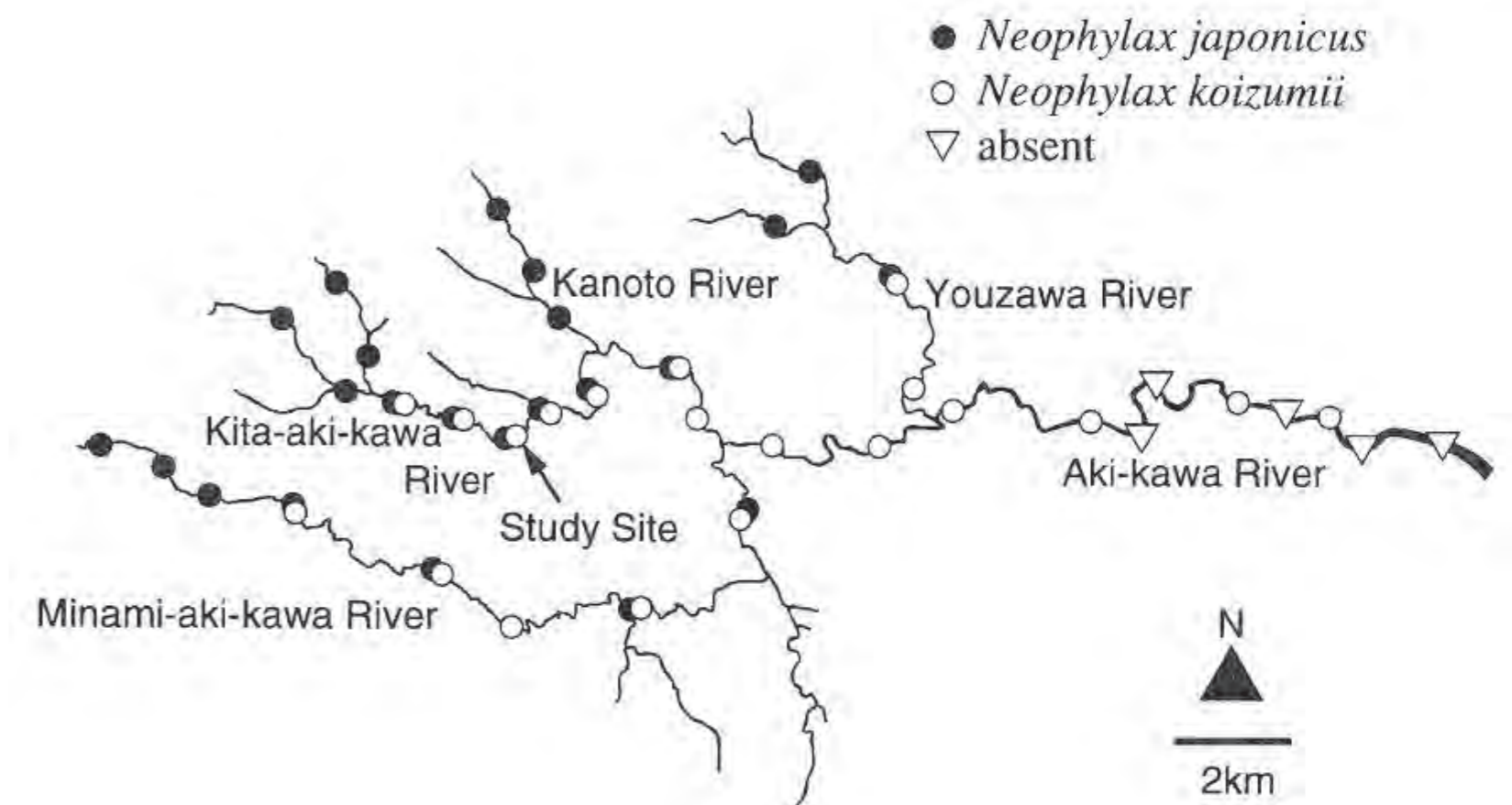


図1 アツバエグリトビケラ属 2 種の流程での棲み分け

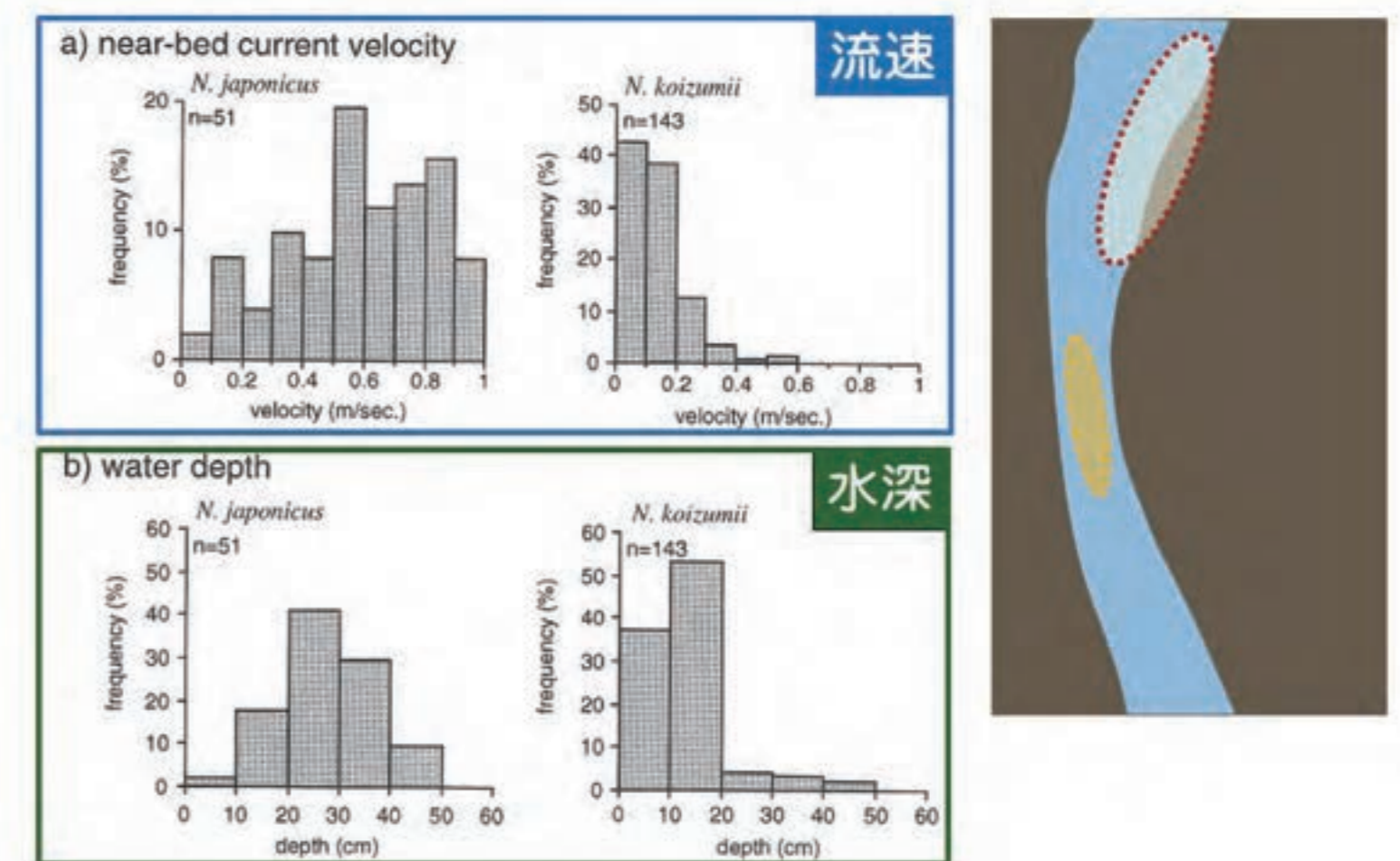


図2 アツバエグリトビケラ属 2 種の微環境での棲み分け